

内閣総理大臣賞受賞

都会の米屋がパートナー 牛と米がつないだ新たなむらづくり

たざわこぎゅうめいがらかくりつすいしんくみあい
受賞者 田沢湖牛銘柄確立推進組合
(モートピア神代)

あきたけん せんぼくし
(秋田県仙北市)

■ 地域の沿革と概要

仙北市は、平成17年9月に旧角館町・旧田沢湖町・旧西木村が合併して生まれた県内で3番目の広さ(1,093km²)の市である。秋田県の東部中央に位置し、奥羽山脈を挟んで岩手県と隣接している。市のほぼ中央には、水深日本一の湖「田沢湖」が青く澄んだ水を湛えており、東は秋田駒ヶ岳、北は八幡平と山に囲まれ、南は仙北平野へ開けている。面積の約8割が森林で、それを源とする河川は仙北地域の水源となっている。耕地面積は5,520haであり、このうち89%は水田が占めている。市の南部は仙北平野から続く平坦地であるが、北部は500~1,000m級の山々が連なり、面積の約9割が山林・原野で占められる典型的な山村地帯である。冬期間の積雪量が1.5~2mと多く、積雪期間が150日以上の特豪雪地帯でもある。

武家屋敷や桜の名所で、みちのくの小京都とよばれる角館、水深日本一の田沢湖、全国的にも有名な名湯や秘湯、スキー場などのレジャー施設、伝統的なお祭りや芸能などの資源が集積しており、年間620万人もの観光客が訪れる、県内でも有数の観光地となっている。

また、盛岡市と秋田市を結ぶ国道46号などの3本の国道が交差する道路交通の要衝

第1図 位置図



* 白地図KneMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

【田沢湖牛銘柄確立推進組合(モートピア神代)】

| 項目 | 内容 | |
|-----------------|-----------|-------------------|
| 規模 | 集落 (25集落) | |
| 性格 | 機能的な集団 | |
| 農家率 (内訳) | 総世帯数 | 42.5 % 1,425 戸 |
| | 農家数 | 606 戸 |
| 販売農家数 (内訳) | 専業農家 | 38 戸 |
| | I種農家 | 177 戸 |
| | II種農家 | 340 戸 |
| 主要作物 (農業産出額) | 水稻 | 4,100 百万円 |
| | 野菜 | 1,160 百万円 |
| | 畜産 | 1,160 百万円 |
| 農用地の状況 (内訳) | 耕地計 | 1,473 ha |
| | 田 | 1,434 ha |
| | 畑 | 35 ha |
| | 採草放牧地 | 1 ha |
| | 耕地率 | 18.5 % |
| | 1戸当たり面積 | 2.4 ha |

※ 農家率、販売農家数は、旧田沢湖町のデータ

※ 主要作物は、仙北市のデータ

※ 農用地の状況は、旧神代村のデータ

であることに加え、新幹線の停車駅を二つ（「田沢湖駅」、「角館駅」）有し、首都圏などとのアクセス環境が整っている。

田沢湖の南西に位置する神代地区は、仙北市の中でも比較的平坦で積雪が少ないものの、冬期間の厳しい北風から家を守るため屋敷杉に囲まれた農家が点在し昔ながらの田園風景に加え、山々の緑と清らかな溪流など、豊かな自然に囲まれた地域である。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

近年、高速交通ネットワークの整備と相まって、都市住民と農山村の住民が相互に行き交うライフスタイルを広め、自然環境や生活文化、伝統産業等の地域資源を活用した様々な共生・対流への取組が、地域の重点的な産業対策として位置付けられている。これまでも30年以上前からスタートしている農村における修学・学習旅行の受け入れや、県内初の農家民宿開業など、県内におけるグリーン・ツーリズムの先駆けとなる取組が進められてきた。

農業産出額は70億2千万円であり、米を基幹に、野菜や畜産などが主要な作物となっている。最近では、「寒締めほうれんそう」に見られるように、当地域の厳しい自然条件を逆手にとった農産物生産も行われており、高付加価値農業への積極的な取組がなされている。その中で神代地区は、総世帯数1,425戸（うち販売農家数555戸）であり、農家1戸当たりの経営面積は2.43haと、市内平均と比較して大きな規模となっている。「モートピア神代」の活動拠点がある院内（いんない）集落は、神代地区の最北部の1集落で、総世帯数は44戸、うち販売農家数は20戸となっている。ここには、モートピア神代の牛舎や里山があり、ここで行われる交流会等の行事の運営にはモートピアのみならず、集落の住民が自治会活動の一環として密接に関わっている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

昭和30年代中頃、神代地区では和牛の導入に併せ、稲作では土づくりを大きな目標として掲げ、和牛から生産された堆肥投入による良質米生産の基盤が築かれ、昭和54年頃から本格的に有機米栽培の取組が始まった。この米が当時愛知県の卸業者が行った米のコンテストでグランプリを獲得したことや、56年の不作時にあっても安定した収量・食味を提供できたことなどが評価され、一躍、業界の注目を浴びることとなった。

和牛農家の天日干しの米として売り出し、積極的なPRとブランドイメージづくりに努めた結果、昭和60年頃には「神代有機米(※)」として全国から引き合いが殺到した(※：当時は「有機米」の名称が使えた。なお、後に「じゃんご米」のネーミングに変更)。

このように、地区内の耕種・畜産農家が連携して循環型農業を進めたことで、昭和58年には一時、地区内の和牛飼養農家は約200戸、飼養頭数は500頭を超

えるまでになり、じゃんご米の作付けも約200haまで拡大した。

しかし、平成3年の牛肉輸入自由化や生産者の高齢化等により、地区内の和牛飼養頭数が大きく減少し十分な堆肥が確保できない状況や、堆肥の散布作業が重労働であったことで「じゃんご米」の作付面積も年々減少していった。

さらに、一連の農作業の機械化の進展により、農家総出での共同作業が少なくなったことや会社勤めの農家が増えたことなどから、地域の米作りに関する一連の神事、風習も途絶えた。このため、「地域の誇りである牛も米も、むらも全てだめになってしまう」そんな危機感が地元の農家の中に募っていった。

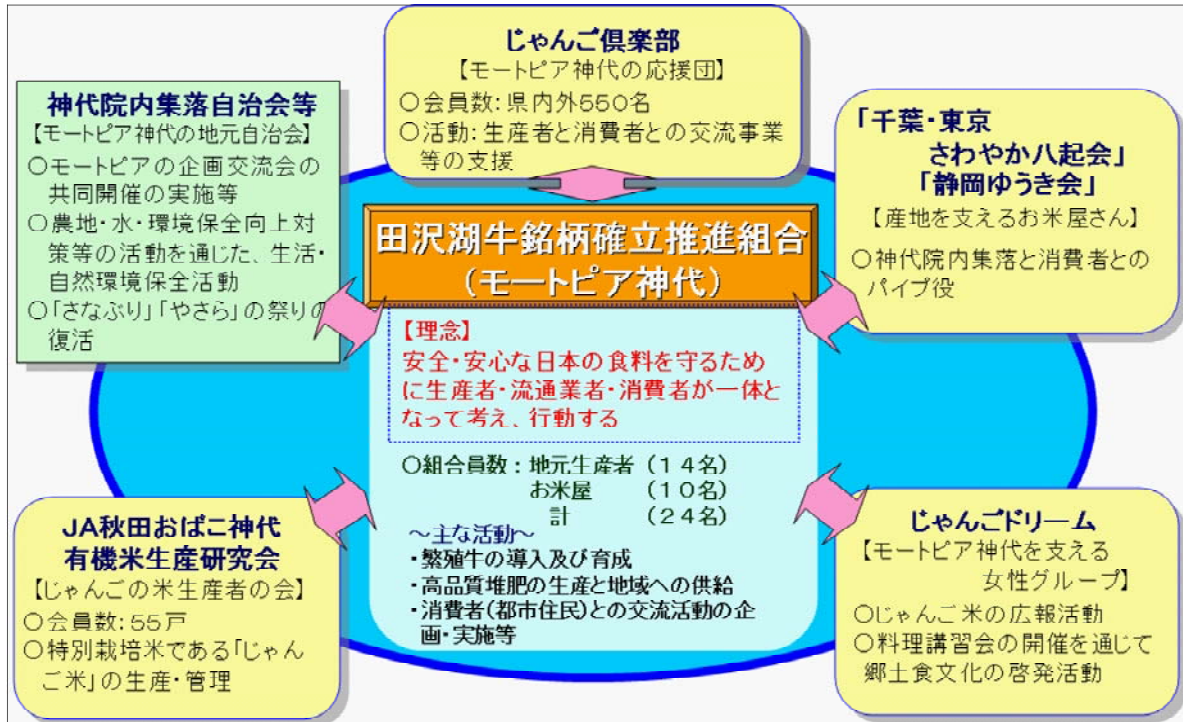
じゃんご米が存続の危機に瀕していた時期の平成7年、生産地のピンチを救済すべく、後にモートピア神代の組合員となる千葉県、東京都、静岡県のお米屋さん有志が資金を出し合い、マニユアスプレッダー（堆肥散布機）導入に協力してくれた。この取組を契機に、じゃんご米生産者との米を高く評価している米小売り業者の絆が深まり、農家には自分達の築いてきた農業を守り、続けていかなければという思いがさらに強くなった。

平成3年頃から、地域の肉用牛振興と堆肥の安定供給をどうしていくべきか、さらには、地域農業を活性化するためにはどうすべきかについて、生産者以外の地域住民にも広く呼びかけ、話し合いを重ねながら、有効な方策を検討してきた。一方で、「消費者には今後の農業について生産現場を踏まえて一緒に考えてもらいたい」との観点から、取引先の米屋さんにも声をかけ、和牛や米づくりの現状を知ってもらい、生産者と消費者、都会と農村の垣根を越えた「仲間づくり」を進めてきた。その結果、改めて「安全・安心な日本の食料を守ろう、そのためには生産者・流通業者・消費者が一体となり考え、行動しよう」との理念を掲げ、「じゃんご米」でつながりがあった千葉県、東京都、静岡県のお米屋さんの賛同も得、平成9年に地域の畜産振興と地域農業の活性化等に向け、「田沢湖牛銘柄確立推進組合（通称：モートピア神代）」が設立された。

(2) むらづくりの推進体制

モートピア神代は、24名の組合員（生産者14名、米小売店店主10名）により構成され、組織の活動資金は、組合への加入金（1口40万円）と牛や堆肥の販売収入により賄われている。組合の運営形態は任意組織であり、和牛の飼育管理者として職員を雇用し、肉用牛の生産、堆肥の生産と供給、ヘルパーによる畜産農家への支援、消費者との交流などの活動を行っている。なお、一連の活動を進めて行くうえで、他の組織や団体との連携が不可欠であることから、地元の「神代院内集落自治会」、じゃんご米を生産する「神代有機米生産研究会」、モートピア神代とともに活動する「じゃんご倶楽部」、首都圏等のお米屋さんのグループ「さわやか八起会」「静岡ゆうき会」、地元女性グループの「じゃんごドリーム」などと役割分担を踏まえながら有機的に活動を展開している。

第2図 むらづくりの推進体制図



ア 神代院内集落自治会等

モートピア神代が企画する様々なイベント活動を支援したり、また、「道路愛護会」「院内川上流河川愛護会」が実施する集落環境を一緒に行うなど、むらづくりを連携して行っている。

イ 神代有機米生産研究会

昭和63年に神代有機米（後のじゃんご米）の生産者責任などを明確化するため、生産者組織である「神代有機米生産研究会」を設立し、じゃんご米の品質維持に努めている。

ウ じゃんご倶楽部

平成12年にモートピア神代による生産者と消費者との交流の輪をさらに広げようと「じゃんご倶楽部」を発足。現在では、地域農業の活性化等に向けた活動に賛同した県外会員が大幅に増え会員数は550名となっている。会員に対して年2回程度、会報を発行するほか、「消費者・生産者の現地交流会」、「消費地を訪問しての新米まつり」など、年を追うごとに多彩な活動を進めている。

エ さわやか八起会・静岡ゆうき会

モートピア神代の組合員でもあり、首都圏等で“神代地区”と消費者のパイプ役となるお米屋さん達で、「さわやか八起会」、「静岡ゆうき会」が組織されており、首都圏の消費者にじゃんご米等の神代農産物の販売や情報発信を行っている。



写真1 さわやか八起会

オ じゃんごドリーム

モートピア神代の活動を支援する女性グループであり、首都圏のお米屋さんで開催される「神代まつり」で、地元農産物等の販売やPRも行っている。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 耕畜連携をベースに、消費者ニーズに即した生産活動を展開

地域の肉用牛生産の振興と高品質堆肥の安定供給のため、耕種農家・畜産農家の連携システムが確立されており、和牛のみならず、安全・安心な米づくりや野菜の生産拡大などの取組を基礎として、消費者ニーズに沿った安全・安心で付加価値の高い食材を供給することで、オンリーワンの地域ブランドを確立するとともに、農家の経営安定を実現しており、マーケティング主導型産地のモデル的な存在である。

(2) 消費者を巻きこみ、味方につけ、地域を活性化

理念に賛同する消費地の米小売店が組合員として結集したことや、地域のサポーター・応援団を組織化し、地域のエリアにとどまらず、様々な主体を取り込んだ広域のネットワークとして機能している。

(3) 地域内の活動組織がそれぞれの役割を発揮

モートピア神代、神代有機米生産研究会、集落自治会などが、それぞれの方針に基づき、特徴的な取組を行っているが、トータルとしては相互に補完しあいながら、地域全体として、優れたコミュニティ活動である。

(4) 次の世代にバトンをわたせる夢のあるむらづくり

地域の皆が、時には地域外の人も巻きこみながら、「これからの農業」や「これからの神代」について語り合い、今後に展望が持てる生産活動、むらづくり活動を絶え間なく追求している。また、モートピア神代に結集する生産者や米屋では後継者が次世代の活動について話し合いを進めている。

2. 農業生産面における特徴

モートピア神代の2棟の牛舎では、繁殖経営とともに地元から素牛を導入す

る事により地域の和牛振興を図っている。先進的な技術も多く取り入れ、低コスト・省力化を図りながら優良な和牛を生産する畜産経営のモデルケースとなっている。また、地域農家に牛舎を公開する他、地元の後継者育成のための研修者を受け入れたり、畜産農家へヘルパー派遣を行うなど、地域に広く貢献している。また、平成18年から、消費者の方々にもっと身近に神代の和牛生産を感じてもらえるよう和牛のオーナー制度を開始した。

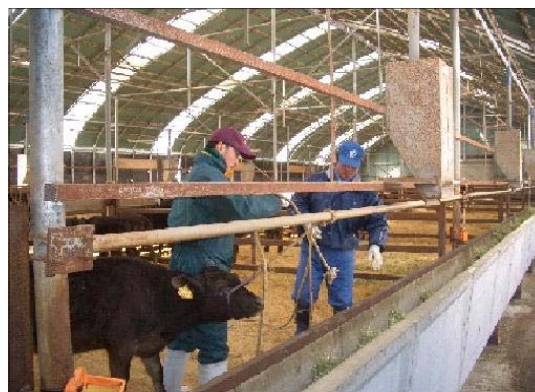


写真2 後継者育成研修

(1) 地域のモデルとなる和牛大規模経営と先進技術への取組

モートピア神代の和牛の飼養管理については、整備された近代的な牛舎で、大規模経営に取り組んでおり、多頭化経営に伴った地域のモデルとなっている。夏場は労働力調整と牛の繁殖成績向上の観点から近隣の放牧場を利用し、生産性の向上を図っている。子牛を早く母牛から離し、哺乳ロボット（子牛へ自動的に哺乳させる機械）を利用して飼育することにより、子牛は常時ベストの状態のミルクが給与され事故率の低減に繋がっている。また、母牛にとっては早期離乳によって発情回帰が早くなり、繁殖率の向上へとつながっている。さらに、繁殖成績を高めるため、牛の歩数によって発情を発見する装置を導入しており、発情を逃さず適期に種付けを行うことが可能となっている。これらの先進的な技術は県内でも取り入れている農家が少なく、地域の和牛農家に牛舎を開放することで、畜産農家への技術の波及にもつながっており、県内の畜産振興に大いに寄与していると言える。

(2) 当該集団等の活動による構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保

肉用牛経営は、高齢化や担い手不足によって戸数が減少しており、大家畜を扱うことによる重労働作業が高齢者の離農や、後継者就農の妨げとなっている。こうした状況を改善するため、ヘルパー制度により子牛の運搬から上場、引渡しまでの一連の作業等を請け負うなど肉用牛経営における労働の省力化になり、農家から好評を得ている。また、牛舎を後継者の研修の場とするなど、将来地域の担い手となる後継者の育成に寄与している。

(3) おいしさ日本一を目指した米づくりへの取組：完熟堆肥施用

供給する完熟堆肥は、切り返しを充分に行うことで、使いやすく、水田に適した高品質堆肥生産を実現し、じゃんご米生産の基礎となる土づくりに貢献している。また当該地区においても、経営安定化を目指し、水田転換畑を活用した複合作物が進められており、野菜や花き等の複合作物は、水稻以上に土づくりが重要であることから、生産した堆肥を稲作農家だけでなく複合作物農



写真3 たい肥散布

家へも提供するなど、耕種農家への堆肥供給を一手に引き受けている。

(4) じゃんご米の販売促進活動

毎年、新米の採れる10月には、「神代まつり」と銘打って、モートピア神代組合員である千葉県や東京都、静岡県のみ販売店を訪問し、産地直送の新米祭りを行っている。このような取組により、消費者に秋田の神代地区を知ってもらうための場として様々なメッセージを発信し、また、消費者の意見・要望を踏まえた産地づくりに努めるなど、じゃんご米や地元食材の販売促進にも繋がっている。

3. 生活・環境整備面における特徴

モートピア神代と拠点のある院内集落は、共通の理念に支えられ、結びつきが強い集落活動を行っており、組合員が積極的に自治会役員を中心メンバーとして活動の企画・運営に携わっている。また、集落内の非農家にも参加を呼びかけ、「農地・水・環境保全向上対策」を始めとする各種活動にも地域全体として取り組んでいる。その活動の一つとして「道路愛護会」を結成し、道路周辺の草刈りやスイセン、チューリップを定植し道路環境の整備に努めている。また、かんがい用水として利用され、農業の源である院内川の河川環境を守る「院内川上流河川愛護会」は雑草が繁茂する夏場の草刈りや環境美化のための清掃活動を行っている。さらに地域内の一部水路では、U字溝の整備を途中で取り止め、昔ながらの土水路として、生き物に優しい環境づくりを創出している。

(1) 里山の復活

モートピア神代では、畜舎周辺の荒れた雑木林を切り開き、モートピア神代の活動に参加した方々とともに、桜や栗を植樹し、豊かな山の恵みが得られる里山を復活させた。里山は農村に居ながら自然に触れあう経験が少なくなった地元小学生が、古里の自然を身近に感じられる体験学習の場としても活用されている。

(2) 「さなぶり」「やさら」の復活

昔は、田植えや稲刈り後に行われていた農作業の労をねぎらい、また、神様に豊作を願い感謝する行事（「さなぶり」、「やさら」）が行われていたが、農業機械の普及とともに共同作業が無くなり、これら行事も一時途絶えていた。こうした中で、じゃんご米の振興には生産者間の交流団結が重要と考え、平成15年から伝統行事を復活させた。

(3) 女性の集落活性化への貢献

J A秋田おばこ女性部会員で、院内集落に住むじゃんご倶楽部会員5名が「じゃんごドリーム」という集まりを結成し、次世代に郷土料理を引き継ぐための情報を交換したり、地元食材を使った料理講習会を行っている。

(4) 消費者と生産者の現地交流会

「生産者と消費者との交流・親睦を通して明日の食料を共に考え、農業の活性化に貢献する」という理念のもと、都会の消費者との交流を行っている。交流会では、田園風景が広がる「農道ウォークラリー」や集落農家を訪問する「のほほん田舎体験」、「イワナつかみ捕り」また、水田での農作業や大根、里芋の収穫、トラクター試乗等、昔ながらの農村を満喫しながらの農業体験を提供している。参加した消費者からは「また来ます!」、「心が洗われた気分!」、「農作業って大変だと身に染みました。貴重な体験でした」、生産者からは「消費者の貴重な意見を聞くことができた」等の感想が出されるなど、お互いにとって有意義な、かけがえのない交流の場となっている。



写真4 現地交流会